

東南アジア学会開催校企画シンポジウム

日本のなかの東南アジア：移民第二世代に注目して

本シンポジウムは、日本において移民が形作る社会を対象とするが、日本社会への移民の統合という政策学的な視点からの考察というよりも、さまざまなコンテクストを持つ人々が交錯する舞台として日本を捉える。そのうち特に東南アジアを出身地としてもつ人々の日本を中心として作り上げられた関係性に注目し、それぞれの報告者のフィールド調査に基づいて、その実態を多面的に理解しようとするものである。本企画においては、彼らが形成してきた地理的、あるいは民族横断的な開かれた越境的ネットワークの一部分を構成するものとして日本における彼らの活動を捉えるものとする。

プログラム（2024 年 12 月 8 日）

13:00～13:10 松村智雄（大阪大学）・近藤美佳（大阪大学）

趣旨説明と大阪大学大学院人文学研究科附属 複言語・複文化共存社会研究センターの紹介

13:10～13:30 報告1 近藤美佳（大阪大学）

在日ベトナム人家庭における「認識されないもの」

13:30～13:50 報告2 瀬戸徐映里奈（近畿大学）

在日ベトナム人第二世代にとってのベトナム経験の意味

13:50～14:10 報告3 梶村美紀（国立民族学博物館外来研究員）

日本定住ビルマ/ミャンマー人 2 世のアイデンティティ形成 ―出自へのこだわりと日本への親近感に着目して―

14:10～14:20 質疑応答

14:20～14:30 休憩

14:30～14:50 報告4 矢元貴美（大阪大学）

フィリピンにルーツを持つ子どもの「つながり」の活用

14:50～15:10 報告5 永田貴聖（宮城学院女子大学）

在日フィリピン人たちのトランスナショナルな実践

15:10～15:30 報告6 中谷潤子（大阪産業大学）

在日インドネシア人によるインクルーシブな宗教コミュニティの形成

15:30～15:40 質疑応答

15:40～15:50 休憩

15:50～16:10 コメント 高畑幸（静岡県立大学）

16:10 ~ 16:40 総合討論

【各報告の要旨】

報告 1

在日ベトナム人家庭における「認識されないもの」

近藤美佳（大阪大学）

日本で暮らすベトナム人の数はいまや 50 万人を超す。在日ベトナム人は、「難民」として入国した人々の層と、現政権の「派遣あるいは許可」を得て入国した人々の層との「二層構造」を成していることがかつて指摘されたが、今やその「層」はさらに細分化している。さらに、日本における在住外国人への教育支援体制や、ベトナムの海外在住ベトナム人に対する姿勢も大きく変化している。そんな最中に日越の言語と文化の間を揺れ動きながら子供時代を過ごした若者の語りや、公立学校内に設置された母語教室での実践の分析を通して、彼らの家庭等におけるベトナム文化実践の中に、子どもたちに「認識されないもの」があることを指摘する。そして、母語教室の授業実践によって、それらを拾い上げ、知識として定着させることができる可能性について検討する。

報告 2

在日ベトナム人二世世代にとってのベトナム経験の意味

瀬戸徐映里奈（近畿大学）

本発表の目的は、難民として渡日したベトナム人二世世代のなかでも、ベトナムに長期滞在経験のある 20～30 代（当時）に着目し、その渡越がどのように選択され、その際にどのような社会関係が利用・創出され、その後の生活にどのように生かされていたのかをインタビューから明らかにすることである。調査の結果、渡越の目的は語学留学・就労であったが、その背景にはベトナムの政策転換と日越の経済的交流が大きな後押しになっていたことがわかった。また、特に移住初期はかれらの生活はかれらの親類が支えており、親類たちのベトナムの農村一都市的移住が二世たちの帰還を手助けしている点も浮かび上がった。これらを通して、難民の本国社会への接続、いまだ軋轢を残すベトナム統一過程の一端を二世の渡越から検証することができた。また、ベトナムの滞在経験は単なるキャリア形成のためではなく、アイデンティティ形成にも寄与していることが明らかになった。

報告 3

日本定住ビルマ/ミャンマー人 2 世のアイデンティティ形成 ―出自へのこだわりと日本への親近感に着目して―

梶村美紀（国立民族学博物館外来研究員）

本発表では、日本定住ビルマ/ミャンマー人 2 世（1.5 世）のアイデンティティ形成について、「出自へのこだわり」と「日本への親近感」を軸に考察する。2 世はミャンマーでの居住経験がないか、あっても限定的であるものの、親の祖国や特定の民族グループに対して繋がりを感じ、家庭でミャンマー語や伝統を継承しようとする姿勢もみられた。一方、日本国籍の有無に関わらず、日本での生活に順応し、日本社会への帰属意識も醸成されているが、自らを「日本人」として認識してよいのか、日本への愛着の表現には葛藤も生じている。

2021 年のミャンマーのクーデター以降、同胞との繋がりや日本社会との接点が増加している。2 世は「何人（ナニジン）」という問いや国籍に対する固定観念を超え、ミャンマーへの意識を持ちながら、日本で独自かつ多層的なアイデンティティを形成していることが示唆される。

報告 4

フィリピンにルーツを持つ子どもの「つながり」の活用

矢元貴美（大阪大学）

本報告では、フィリピンにルーツを持つ子どもたちのうち、第 2 世代や第 1.5 世代が日本の学校や社会をどのように捉え、彼らの背景や経験、フィリピンや日本とのつながりをどのように活用して生きていこうとしているかに着目する。その上で、彼らがその選択をした要因として日本側の認識がどのように関わっているかを検討する。日本で暮らす彼らの移動の経験、滞日期間、言語運用能力、学習歴、保護者の背景や親族との関係は多様である。彼らがフィリピンの言語を保持・向上させる動機は全体的に弱いが、フィリピンに関わる人間関係の保持・形成については彼らの間で相違が見られる。フィリピンで暮らす親族との関係や日本で同じフィリピンにルーツを持つ者とのつながりを持っているか否か、ルーツを日本で「売り」にするか、生活拠点としてどの国を選ぶのかには、保護者の方針や態度のほか、日本の学校や社会における彼らへのまなざしが影響を与えていると言える。

報告 5

在日フィリピン人たちのトランスナショナルな実践

永田貴聖（宮城学院女子大学）

本報告では、京都市南区東九条に集うフィリピン人たちが展開する「フィリピン」という国家・民族を通じた紐帯を基盤として、移住社会のマジョリティや、他国出身の移住者たちと関係を形成する「トランスナショナル」な生き方について注目する。日本にはカトリック教会等を基盤とするなどしてフィリピン人移住者当事者互助グループが多く存在している。これらは、来日してすぐのフィリピン人にとっては、日本社会とつながるきっかけともなり、長年日本に在住するフィリピン人にとっては「フィリピン」とのつながりを通じて、他国出

身の移住者たちと関わり、複数のナショナリティとエスニシティが交差させる実践を展開するきっかけとなる。具体的には、京都市南区東九条にあるカトリック系国際交流施設に集まるフィリピン人移住者たちは「フィリピン人」であるがゆえに、地域にいる他のナショナリティとエスニシティを持つ人びとと関わり、社会関係を広げる実践の中身を紹介する。

報告 6

在日インドネシア人によるインクルーシブな宗教コミュニティの形成

中谷潤子（大阪産業大学）

2023 年 12 月の在日外国人数約 340 万人のうち、インドネシア人は約 15 万人で、全体の約 4%である。在日インドネシア人は技能実習生と特定技能が約 7 割を占めており、多くは 5 年以内に帰国する。そのため、インドネシア人集住地域やコミュニティは目立つ存在であるとはいえない。

しかし一方で、日本社会に根を下ろそうとするインドネシア人の姿も目にするようになってきている。本報告では、インドネシア人による宗教コミュニティを紹介したい。大阪にはインドネシア人設立のモスクのほか、複数のインドネシア人教会がある。継続調査を行ってきたインドネシア人教会は、在日インドネシア人にとっての大切な居場所であると同時に、日本人も受け入れてインクルーシブなコミュニティを形成している。このインドネシア人教会を中心に、コミュニティの様相を明らかにすることで、国是「多様性の中の統一」を擁した在外コミュニティについて示そうと考える。